

# 「上を向いて生きよ！」

## コロサイの信徒への手紙 3章1節

聖学院小学校・幼稚園チャプレン／聖学院大学非常勤講師 濱田辰雄

人間は基本的に二本足で立って歩き、動く生き物です。猿系統の動物も、手と足を区別して生活をしておりますが、人間ほど長い時間、ずっと二本足で生活しているわけではありません。四本足動物のように手を足のように使って動いています。私はこの体型の違いが人間を人間にし、他の動物と決定的に違う生き物にしたと思っています。それは「上を見る生き物」になったということです。

四つ足動物は上を見て動くことには全く適していません。熊が後ろ足で立って吠える姿をテレビで見たことがあります。それは決して日常ではなくて特例なことですし、猿の仲間でも人間のように、一日中二本足で生活するということは不可能です。ですから上を見る姿というのは、たまにあってもやはり特例に属します。つまり「人間だけが上を見る」ように造られた生き物であり、運命づけられた生き物なのです。

上を見ると、そこには空が広がっています。その空を見て、人は古くからそれを「天」と呼び、又そこには「神」がおられると信じるようになりました。それで「天国」という言葉が、それぞれニュアンスが違って世界中の民族に語られるようになりました。つまり人は上を見ることによって「宗教」を持つようになったのです。宗教や信仰を持つということは、このように上を見上げるようになった人間だけの特殊性であり、まさしく人間であることのしるしなのです。

上を見上げる人間に与えられた営みに「祈り」があります。祈りは頭こそうつむくのですが、心は高く天の神さまへと引きあげられています。祈る人間には神さま、イエスさまが御自身をあらわして下さいます。使徒パウロがコロサイ書で「そこではキリストが神の右の座についておられる」と言うとおりです。確かに人には時としてつらい事、悲しいことがあって下を向きたくなることがあります。しかし、にもかかわらず「上を向いて生きる」。それが大事なのです。人間が人間であるために。そしてその生き方こそが人を魂の底から勇気づける生き方です。

クリスチャンの詩人八木重吉の二篇の詩を紹介いたします。「天」に向かう素朴な人間、素朴な信仰のうたです。

○ 天に神さまがおいでなされると かんがえたむかしのひとはえらい

○ 天

天というのは あたまのうえの みえるあれだ

神さまがおいでなされるならあすこだ

ほかにはいない

2014年4月22日 聖学院小学校 高学年礼拝